

れ手伝いをいわれて行く。四日目、十人の兵隊と看護婦一人が避難してきた。翌日兵器持ち込み理由で暴動となり四人の兵隊が殺害され残りは逃亡した。

死体を野花で葬り団員家族とも即時トロッコに乗せられ退去、風城街は大変な状況にあり県長警察官等三人は公安局裏の川原で処刑された。

十二月初旬より寒さと飢えの中、ソ連軍の強制労働で田師付と本溪湖間鉄道の撤収をする。三月から八路軍の使役。六月風城脱出に失敗し留置所に入る。七月団員婦女子三十二人二回目の脱出、八路軍と中国軍激戦の中、奉天を目指した。子供一人背で死亡、一人は置き去り、暴挙に悩まされ八月中旬に着く。私は二十一年コロ島より帰国。

終戦時哈達河開拓団の長兄家族は八月十二日避難命令が出て本部に急送したが全員逃亡している。必死に追うが目沼集団には追いつけず別行動となり、あの麻山事件には巻き込まれずに済んだが途中父は流れ弾、姉はソ連軍包囲により自決。兄衰弱死亡、兄嫁子供二人は十一月無事帰国した。

新聞の尋ね人に四人殺害と逃亡した戦友の状況を掲載したが生死不明今だに家族も解らない。茂兄はシベリア抑留後二十三年帰国した。

## 暗黒の新京

北海道 平野 勇

私は網走と空知支庁管内で小学校の教員をしております。たまたま先に渡満していた旧制中学時代の先輩から、五属共和をモットーに王道築土の建設を目指す国策に沿って満州で活躍してみないかとのすすめもあったことから意を決し、昭和十四年四月九日渡満、二十七歳のときである。

満鉄の系列である国際運輸株式会社に入社（既に二月札幌での入社試験で採用済）新京視点金融倉庫係勤務となる。（同時に私立国際運輸新京青年学校教師をも兼務）内勤三年後、係所属の倉庫営業所、他一営業所長として現場業務に携る。昭和十八年のこの頃は、もう満、白

露人の社員とも気心が通じ内地では味あえぬ民族の交流に浸りながら運輸報国に燃え、一段と社業に励んだ。

さて戦況はどうであったか……ミッドウエー海戦の敗北を機とし日本軍の重要戦略拠点は次々と失われ、内地の主要都市、軍需施設等の米軍機による爆撃、どうみても敗戦色濃厚の様相となっていた。

二十年にはいるや会社の日系社員にも頻繁に召集令状が来はじめ、五、六月頃は三百人ぐらいた社員は支店長以下三十人あまりしか残っていなかったようである。

そして八月六日広島、九日の長崎と原爆が投下され、遂に十五日日本の敗戦降伏が決定した。ここで記憶を前に戻します。

満州にも二十年にはいつてB29が飛来し奉天や鞍山の工業地帯に小規模ながら爆弾投下が開始されている。新京にもときどき機体を見せたが被害はなかった模様。

八月九日夜半突如大音響が市民の耳を破った。てっきりB29の爆撃かと思った。朝ラジオによってソ連機の爆弾投下であり、満人街の被害死者数、そして国境周辺ではソ連軍と関東軍との戦闘状況にあることを報じた。

ソ連は日本に対し宣戦布告したのである。百万都市新京は俄に騒然となってきた。ソ連軍の新京侵攻は時間の問題と予想された。

本社は（当時新京宝山ビルにあった）急遽吉林支社に移駐する。日系社員の残留家族を通化に疎開させるの達しが出、家族一世帯の小荷物三個を限度とし通化に送るため、この荷物の各地域社宅よりの集荷運搬作業を私の営業所の馬車によって行ってくれるよう支店長より依頼があった。

十二日ちょうど灯火管制下の暗闇をついて馬車二十台で決行された（馬車頭の温い配慮に深謝する）。

新京駅は関東軍関係の家族達を最優先として疎開で大混乱をていしていた。私達の会社関係の疎開は十四日となり、駅ホームで家族と最終となるかも知れぬ別れを悲しんだ。

どのような事情があったのか行き先は吉林に変更となった。運を天に任せての家族との別離であった。

駅より社宅に戻って驚いた、留守の全社宅十二棟（一棟二戸建）は暴民の乱入によって惨たんたる光景をてい

していた。家財やその他めぼしい物は略奪されていた。

私は仕方なく支店で仮泊することになる。全満の国際運輸の業務は十二日頃より完全に停止してしまつた。十六日午前店長より本社に連絡してあるので支店の工人(苦力)と馬夫の未払労賃を本社より搬送して来てほしいとの指示があり他二人でかます一個づつ(かますの上)に野菜を被せカムフラージしてあつた)背負つて雑踏のダイヤ街を戦々恐々命がけで支店に運び込んだ。この賃金が若し未払となつた場合若力頭とか馬車頭の反動を思うと戦慄を覚ゆるのであつた。

次、吉林の治安はソ連軍が入つて日増に悪化の情報が流れて来ていた、疎開した家族の安否が気遣われ支店長の了解を得て、私の後任の倉庫営業所長のK君と二人で満服に身をまとい東新京駅より鈴なりの満杯列車で吉林行きを決行したのである。

疎開した家族達は東満の支店、営業所の社員家族共々吉林支社の配慮で、かつて関係あつた料亭の大広間を開放してもらい雑居生活をおつた。私達二人の突然の訪れを喜び涙を流し合つた。私達はみなさんを新京に連

れ戻したい……みんなも、なんとしても帰りたいとの答えがあつた。

翌日吉林支社を通じ吉林鉄道局に懇請した結果、新京行臨時列車の編成を了解された。

但し途中如何なる異変が突発し人命にかかる事態が生じてても責任はとれない旨の局員の話があつて一同異議もなく了解する。新京に帰りたい一念であつた。

心に不安を抱きながら殆んどが列車に乗り込んだ。列車は夕方吉林を発車した。速度はのろかつた、車内は灯火管制で駅のない所できどき停車した。その度に銃声が聞え身を寄せ合つて無事を祈つたものだ。

あの距離を二日あまりもかかつて九月十四日夕方漸く暗い新京駅に辿りついた。待合室の冷たいコンクリートの床に腰を下すことができた。夜間の行動は禁じられ駅で一夜を明す、新京にも駅にソ連軍が進駐していた。翌朝国際運輸支店前で一同はそれぞれの行先を求めて名残りを惜み、「頑張つてね」を合言葉に解散した。

私とK君の家族は運よく私の営業所のS氏のお陰で支店の近くの林ビル三階に軍属が人居していた空家がある

とのことで、そこに入れたことはありがたかった。S氏も二階に入っていた。

九月も下旬になると北満や東満の開拓団の人々（主に婦女子、中老年）が命からがら裸同然で辿り着いたのであるが、ただ茫然生ける屍そのものであった。会社周辺に新京開拓会館とか、個人経営の新京ホテルがあったので満拓公社関係の方々によって、難民の収容作業が行われたのであろうが、とても全員の収容は不可能で他の収容所に割当てされたことであろう。

十月の声を聞くとともに朝夕の寒冷も厳しく近くの収容所の開拓難民は、体力消耗激しく加えて発疹チフス等で毎日一人二人と死亡者が始まった。

新京市中は旧満軍、警官等の暴動、ソ連兵の家屋侵入、略奪、日系男子の徴用狩りの暴挙等々日系居留民は一日たりとも安らぐ日とてなかった。外地での敗戦国民の惨めさ、辛さは今日いまだに忘れられない。

八路軍がはいって来て、治安は少し落ち着いたのもつかの間、中国正規軍（国民軍）との戦闘で市中はまた大混乱、八路軍の撤退で国民軍が治安に当るようになって、

日系居留民の内地帰還説が巷に飛びかいた始めた。

然し疎開せず新京に留まっていた者も、疎開して丸裸になった者も、大なり小なり持っていたものはすべて生活に費し、引揚げが延びれば延びるほどその日暮しに追われ、かつての身分も地位も棄て俄か街頭行人商人になったり、中国人に低賃金で雇われて露命をつないだものだ。私の会社の上司夫妻は、若い除隊兵（日系）に銃殺されたり（上司は露語堪能で中国人と露人の共同会社に努め重宝がられ、国際運輸の若い兵隊上りの社員を会社に雇って貰ったことに除隊兵は上司を売国奴と誤解したようだ、右翼思想か）。

私の何人かの社友の家族にも発疹チフスで死亡し、郊外の大房新に荷車に遺体を乗せ凍土を掘って埋葬を手伝ったが、日本の土をふまずに逝ったことをどれほど残念であったことか思わずにおれない。

二十一年十月待ち焦がれた祖国への帰還が到来した。

私は新京吉林地区引揚者小隊長として（妻と子供二人を連れ）無蓋車にすし詰となって一路錦西に向った。錦西の収容所で検疫とか所持品の検査等々三泊して乗船港コ

口島に着いた。港には日の丸を揚げた引揚船（大端丸）が停泊していた。みんな泣きに泣いた。

船はジグザグ航行で（魚雷の浮遊を警戒して）三日ぐらいかかってやっと佐世保港に着いたのであった。（上陸は十月十四日）

申し遅れましたが私は引揚げまで支店長の斡旋で中国人経営の「長春貿易公司」で働かしていただき糊口をしのいでくれたことを感謝しております。

故郷に戻ってから、かつての同輩から教員にならぬかと親切にすすめて下さったが八年近くのハンデーもあり、また住宅等の問題等もあって見合わせることになる。

二十三年初め義兄の口添えて三菱鉱業（株）上芦別鉱業所 資材課に勤務することになった。

住宅も貸与され、その他配給物資、厚生福利面も比較的よかったことも三菱入りの理由でしょうか……定年退職を間近にして三菱鉱業の協立会社に転じ六十歳で職を退きました。いまは苦勞をかけた妻と二人で細々と年金で晩年を歩んでおります。

## 満蒙開拓に参加の動機

北海道 長倉直松

私は明治四十二年一月秋田県の山村の農家に生れ、兵役の義務を終えた翌年の昭和七年外務省巡查満州国勤務を希望し、十月に弘前市にて行われる採用試験の日を待っている矢先に、村役場の兵事係りが来訪国策重大事業として在郷軍人から満蒙開拓武装移民五百人募集することに成りましたからとすすめられました。

一刻も早く彼の地へ渡りたい希望を抱いていたときなので早速その方に決意を定め応募致し合格、岩手県六原道場にて三週間の基礎訓練も済ませ出発の日が待ち遠しい毎日でした。愈々出発渡満

東北六県、関東五県から木工・鍛工・醸造を含めた精鋭百九十五人出発に決定、予め各連隊区から軍服軍靴の支給を受けて出発に備えておりました。

愈々九月末日出发、宮城を遙拝、明治神宮参拜、意気